

随筆



遥かなる ロサリオへの郷愁

嶺井医院 泌尿器科
嶺井 定一

移民100周年記念で、昨年ブラジル・サンパウロ市、アルゼンチン・ブエノスアイレス市は記念行事で賑わった。しかし、アルゼンチンの現政権下で、経済的危機状態が再び憂慮される今日、特に地方はどうであろうかと、そのような思いを胸に自分の出生地ロサリオ市を訪ねてみた。

瘋癲の寅さん風に自己紹介すると、「私、アルゼンチンは、ラプラタ川の上流パラナ川の辺、ロサリオ市で生を受け、その水で産湯を使い、育ちはロサリオ市、大里村、名護町、那覇市、久留米市と転々と暮らして参りました。名は人呼んでFERNANDOと呼ばれております。社会常識が、かなり欠落している医師が多いと豪い人が発しておりますが、私もその中の一人で、医師会の皆様にも迷惑の数々をおかけしている無智者でございます」。

アルゼンチンへは、アメリカのアトランタで乗り継ぎ、ブラジルのサンパウロ経由で、数日後、ブエノスアイレスへ這入り、一泊後、ロサリオへ着いた。

ロサリオはアルゼンチンでは、ブエノスアイレス、コルドバに次ぐ第三の都市で、現在、人口約91万の都市であるが、ガイド・ブックにも掲載紹介されてなく、こゝに多少紹介したい。

首都ブエノスアイレスの北西310kmのラプラタ川上流のパラナ川右河畔に面した古い港町(港町と言っても海はない)で、アルゼンチン北東部への鉄道運輸の発着駅、パラナ川海洋船舶の物流の拠点で、以前は相当繁栄した都市であったらしいが、私が20年前(1986年)訪れた時は街は活気がなく、うらぶれた感が否めなかった。今回訪ねた時は、街並、道路も整備さ

れ、高層ビルも立並び、建築中の高層マンションも見られ、やや活気が戻ったように見受けられた。

70年以前、私達家族が住んでいた店舗兼住宅は一部がマンションに立替えられていたが、店舗の部分は未だ残っていた。20年前訪れた時は、県出身の方が、私達が使用していた店舗兼住居をそのまま使用しており総べて当時のまま残っていたが、5年前に訪れた時には普通の店舗に代わっていた。これまで幼少の頃、自分が住んでいた住居を見届けることが出来ただけでも幸いだったのかも知れない。

ロサリオ市の歴史を繙いてみると、アルゼンチンは、スペインの副領下にあった1810年に市民による反乱がおこり、1816年正式に独立を宣言しているが、その後も内戦状態は続いていた。1853年に共和制となり、憲法も制定されたが、首都を何処に置くかとブエノスアイレス州とアルゼンチン連合側に分かれて対峙し、ロサリオの名も拳がったが、ロサリオは当時、ブエノスアイレスより繁栄していたにも拘らず、サンタフェ州の首都はコルドバで、ロサリオではないとの理由で認められず、ブエノスアイレスが首都に決まり、アルゼンチン共和国が誕生した。

日系人のアルゼンチンへの移住は農業移民ではないため、農業従事者は、ほとんど居らず、大多数は都市近郊の工場および喫茶店等で下働きをしていたが、ロサリオでは精糖工場で季節労働者として100人前後が働き、更に鉄道工事にも従事しており、多数の日系人が滞在していたようで、日系人のカフェ店(喫茶店)等も繁盛していたようである。

コルドバはロサリオと同州にあるが、首都ブエノスアイレスよりも数年も早く繁栄し、1613年にはアルゼンチン初のコルドバ大学が誕生して、この大学から数多くの文人、政治的中心人物を輩出している。歴史に残る反政府運動や大学革命運動もこの地を中心にアルゼンチン各地に波及している。

最近、我国でもErnesto《che》Gue·va·

raの映画が上映され、長女の小児科医イルディタが来日し講演会等が行なわれている。

ゲバラの本名はErnesto Rafael Guevara de la Sernaで、ロサリオ出身であり、医師であることはよく知られているが、彼はコルドバ大学出身ではなく、ブエノスアイレス大学の出身である、僅か3年間で医師の資格を取得したと伝えられているが、果して短時日で名医になれたであろうか。

彼を崇拜する人々はイデオロギーや宗教観に囚われず、実現困難な理想世界をめざし闘い続け、人間愛と正義感に溢れた革命家であると評価している。従って以前より記念碑建立の事柄が提起されていたようであるが、2003年以降、大統領がキルチネス、フェルナンデスと左派政権が続き、特にキルチネス（正義党）は青年時代《che》Gue·va·raを敬愛していたので、彼を再評価する動きがおこり、生誕80周年に当たる2008年6月14日、誕生の地であるロサリオに銅像が建立された。場所は広大な花も木も無い殆ど草原のような公園の中央にある。銅像は高さ4メートル、重量約3トンで、一般の人々から集められた銅製の金具や鍵などを溶かして作製されたと言われている。しかし、一生を武力闘争に身を投じた《Che》Gue·va·raの行動、生き方に対してはアルゼンチン国内でも「狂信的」と批判する声も強いと聞く。

現大統領クリスチーナ・フェルナンデスに関しては、1974年ペロン大統領の死を受けて副

大統領から昇格したイサベル・ペロンに次いで二人目の女性大統領で、通称エビーターの再来と大いに期待され、「貧困や高失業率を解決し、よい国にしたい」と大統領当選勝利宣言をやり、2007年末に夫のキルチネス前大統領より政権を引き継いだ。最近では世界的大不況にもよるが、大豆や、小麦などの穀物の国際価格の急落の影響を受け経済が急速に減速している。従ってフェルナンデス大統領は、就任から2008年12月で満1年を迎え、就任当時56%の支持率があったが、最近では28%まで落込み、国民から見放されつつある。

アルゼンチンの日系人においても、国内外の不況により、日本への出稼ぎも少なくなり移民100周年を祝ったものの景気悪化で経済不況は深刻である。

戦後、アルゼンチンへ大人に連れられ家族と共に移住した小学生、中学生の児童は幼少時に、自分の意志とは関係なく、異国の荒波の中に放り込まれ、言葉の問題や生活習慣、文化の違いが齎す差別に苦悩し、特に戦後移民は裕福ではなく、幼い子供達も家業を助けるため労働力として駆り出され、高等教育を受ける機会も与えられず、従って生活が安定した職業に就きたくとも学歴面等のハンディがあり就けず、虐げられてきた。彼等も既に50～60歳等の老齢期に達しており、高齢化した彼等一世の福祉の問題も提起され、異国に滞在する日本国民としての同胞に何らかの援助の手を差し伸べてもらいたいと痛切なる叫びの訴えがあった。

以上、ロサリオを中心にアルゼンチンの近況を述べた。

参考文献および資料

- 1) らぶらた報知（新聞）
らぶらた報知社。2001～2008年度
- 2) アルゼンチン日本人移民史 第1巻 戦前編
社団法人 在亜日系団体連合会
アルゼンチン日本人移民史編纂委員会 2002年
- 3) アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史
アルゼンチンうちなーんちゅ80年史編集委員会
在亜沖縄県人連合会 1994年
- 4) 革命児ゲバラ 風媒社 1968年
- 5) ゲバラを脱神話化する 大田昌国著
現代企画室 2000年8月

